連載コラム

第25回

きれいな虫たち（1）

～ コガネムシ や カミキリムシ など ～

もとよし　ふさお
本吉 總男　　2016 年 7 月

これから数回にわたって、みずき野周辺で見つけたきれいな昆虫を紹介しようと思います。ここでは、私がきれいだと感じた昆虫を勝手に取り上げますが、それぞれの昆虫をきれいと感じるかどうかは、人によって違うと思います。きれいというより、グロテスクと感じられる昆虫も含まれるかもしれません。その点はご了承ください。

今回は、コガネムシ、カミキリムシなど、いくつかの甲虫類について述べることにします。

1　コガネムシの仲間

（1）　コガネムシ

コガネムシという名称は、コガネムシの仲間の総称としても使われますが、狭義にはこの虫を指します。光沢のある緑色で、体長は2センチ内外。それほど大きいとはいえませんが、姿も色も最も美しいコガネムシの代表種です。幼虫は土の中で植物の根を食べ、成虫はいろいろな植物の葉を食べています。

コガネムシ　6月中旬　第2調整池

コガネムシのつやのある色彩は色素によるものではなく、頭部や翅（はね）の表面の複雑で微細な構造に当たって反射する光によるもので、「構造色」と呼ばれています。後述するタマムシの色も構造色によるもので、光の当たり方や見る方向によって色彩も異なります。このような色を「玉虫色」といいます。「玉虫色」という言葉は比喩的に、見方によっていろいろに受け取られるような、曖昧なことを表現する場合にも使われます。

（2） アオドウガネ

アオドウガネは姿も大きさもコガネムシによく似ていますが、上面が暗い緑色で、翅(はね)から尻がはみ出しているところがご愛嬌です。アオドウガネはもともと南西諸島などで繁殖していた南方系の昆虫だったのですが、北上して生息範囲を広げ、現在ではみずき野あたりでもごく普通に見られるようになりました。コガネムシと同様、幼虫は土の中で植物の根などを食し、成虫は葉を食べます。

アオドウガネ 8月中旬 第2調整池

（3）マメコガネ

マメコガネは、体長1センチ内外。見た目はとてもきれいな虫ですが、ダイズ、アズキ、イチゴ、サツマイモなど豆類や野菜、種々の草花やバラ、ブドウやウバメガシなど多くの植物の葉を食い荒らす大害虫です。しかし、この虫には天敵も多く、マメコガネヤドリバエ、マメコガネツチバチなど、50種以上の寄生バエ、寄生バチ、狩人バチがいるそうです。陽気そうに見えるこの虫も結構大変だなぁと思います。

マメコガネ 6月下旬 本町地区

日本ではこのように、天敵の存在によって、マメコガネが発生する数に抑制がかかっているのですが、天敵のいないアメリカでの状況は全く違います。アメリカ合衆国農務省（USDA)によると、この虫が1916年にニュージャージー南部の育苗園(いくびょうえん)で発見され、1972年までにミシシッピ川の東の22州とアイオワ州およびミズーリ州に蔓延(まんえん)し、その後、南部と西部に大きく広がっているそうです。そして成虫は数百種の有用植物を食い荒らし、幼虫はいろいろな植物の根を食い、芝生、公園、ゴルフコース、

牧草地に多大な被害をもたらしているようです。たいへん深刻な状態なのですが、根絶は不可能であり、その土地に合った生態の調査と総合的な防除法（農薬、天敵、抵抗性植物の利用など）によって、虫の数をできるだけコントロールすることが必要とされています。なお、この虫は日本からアメリカに入ったとされ、現地ではジャパニーズビートルと呼ばれています。

（4） カナブン

一般に、コガネムシとカナブンという名を混同している傾向があります。どちらかといえばコガネムシ一般のことをカナブンと呼ぶ場合が多いようです。カナブンもコガネムシの一種なので、カナブンをコガネムシと呼ぶのは間違いではありませんが、上記のコガネムシ、アオドウガネ、マメコガネなどをカナブンと呼ぶのは、厳密には正しくありません。右の写真は正真正銘のカナブンです。体長は2.5センチ内外。カナブンはハナムグリに近い仲間ですが、花には来ず、クヌギなどの樹液に集まります。幼虫は腐植（ふしょく）（落葉が堆積して腐ったもの）を食べているようです。写真の個体はつやのある褐色ですが、緑がかった個体もいます。

カナブン　7月下旬　本町地区

ハナムグリの仲間にも美しい虫がいますが、第14回コラム「花に来る虫たち」に載せたのでここでは省略します。この他みずき野周辺には、コフキコガネ、セマダラコガネ、ビロウドコガネの仲間が見られます。カブトムシもコガネムシの仲間です。数はそれほど多くないと思いますが、みずき野周辺にも生息しています。

（5） コガネムシ類の昔と今

私が子どもの頃には、東京あたりにもアオドウガネの近縁種、ドウガネブイブイという虫が多くて、灯火（とうか）を目指して家の中によく飛び込んできたものです。捕まえるとすぐに糞をするので、私たちは「クソカナブン」と呼んでいました。茨城県南にもたくさんいた

と思いますが、今はあれほどたくさんいたドウガネブイブイの姿はほとんど見られなくなりました。南方より北上してきたアオドウガネに駆逐されてしまったのかもしれません。

昔の夏は、家に網戸もなく冷房もなかったので、夜も窓や戸を開けて涼をとっていました。ですから、ドウガネブイブイやコフキコガネ、ビロウドコガネなどが、外の真っ暗闇の世界から電球の光に誘われて、自由に家の中に飛び込んできました。彼らは不器用な昆虫で、部屋の中の壁や家具、時には人の頭などにも当たって落下し、手足を縮めて死んだふりをしました。

金龜子（コガネムシ）　落ちはさまりし　鬢（びん）の髪
金龜子（コガネムシ）　擲（なげう）つ闇の　ふかさかな　　高浜虚子

よほどの過疎地ならどうかわかりませんが、みずき野のような現在の生活環境では、部屋に飛び込んでくるコガネムシの類も滅多にありませんし、闇の深さも感じられません。昔の夏の夜を思い出す懐かしい情景です。

2　カミキリムシ

全国的には非常に種が多く、また美しいものも多いので、昆虫採集家にはチョウと共に人気の昆虫です。しかしみずき野周辺にはカミキリムシの種類は多くありません。ここでは、ごく普通のカミキリムシ2種を選びました。

（1）　ゴマダラカミキリ

ゴマダラカミキリは体長3センチ内外のごく普通に見られるカミキリムシです。黒地に白い斑点をもつ美しい虫で、カミキリムシといえば、この虫をまず思い浮かべます。

ゴマダラカミキリ　7月上旬　本町地区

しかし成虫は果樹の葉を食べ、幼虫は木の幹の中にもぐり込んで、幹の内部を食べるので、果樹園にとっては大害虫です。

（2） キボシカミキリ

キボシカミキリの体長は2～3センチ位。イチジク、ミカンなどを食樹とする害虫。これもごく普通に見られるカミキリムシです。あえて美しい虫とはいいませんが、写真を撮るとき、長い触角を広げて、ポーズをとっているような様子がユーモラスだったので、選んで載せることにしました。

キボシカミキリ 6月下旬 本町地区

3 ハムシ

ハムシの仲間は2～7ミリ程度のごく小さな甲虫ですが、拡大してみると美しいものが多いのです。成虫、幼虫ともに通常は植物の葉を食べます。

（1） クロボシツツハムシ

クロボシツツハムシはテントウムシに似た美しい虫で、体長は5ミリ内外。幼虫も成虫も広葉樹やかなり多種類の植物の葉を食べます。

クロボシツツハムシ 5月上旬 8丁目東隣接地

（２） アカガネサルハムシ

もし大きければ、タマムシに匹敵するほど美しいアカガネサルハムシですが、7ミリ程度の小さな虫なので、残念ながらあまり目に止まりません。ごく普通のハムシで、主にブドウ、エビヅルなどブドウ科の植物を食べます。

アカガネサルハムシ 6月中旬 本町地区

（３） ニレハムシ

ニレハムシはニレやケヤキの葉を食べるハムシで、体長は6ミリ程度。そレほど美しい虫ではありませんが、ケヤキの葉に描いた抽象絵画がなかなかよくできているので選びました。葉の表側の緑の組織を食べて、葉の下の皮を巧みに残すのでまるで絵を描いているように見えます。せっかくの絵にところどころ糞が見えますが、トイレに行く習慣はありませんので、大目に見てやってください。

ニレハムシ 7月上旬 5丁目

4　その他の甲虫類

（1）　エゴツルクビオトシブミ

オトシブミの仲間は、雌が産卵するとき、特定の植物の葉を切って、卵ひとつを葉に包み、地面に落とします。落し文（おとしぶみ）とは、「公然と言えないことを記して、わざと通路などに落としておく文書」（広辞苑）だそうです。オトシブミとはこれらの虫が作る「落し文（おとしぶみ）」に似た包みに由来する名称で、幼虫はこのような包みを内側から食べて成長します。

エゴツルクビオトシブミ　6月下旬　本町地区

エゴツルクビオトシブミは、5～8ミリほどの小さな虫ですが、黒く光沢があり、長い首をもち、その姿は芸術作品のようです。エゴノキやハクウンボクの葉上で見つけることができます。

（2）　オジロアシナガゾウムシ

ゾウムシはゾウの鼻のような長い口吻（こうふん）をもつ甲虫の仲間です。多くは幼虫も成虫も草食性で、野菜を食べる害虫もいます。

オジロアシナガゾウムシは、8ミリ内外の比較的小さい虫で、幼虫も成虫もクズを食草にしています。この虫をきれいだと思う人はほとんどいないかもしれませんが、その

一見すると、小鳥の糞のよう

カメラをぐっと近づけると、こんな姿

オジロアシナガゾウムシ　8月上旬　本町地区

ユニークな姿から、あえて選んでみました。拡大してみると、その怪物じみた姿に驚かされます。でも、拡大してみなければ、その色合いも形も小鳥の糞によく似ています。小鳥に食べられないように、小鳥の糞に擬態しているという説があります。

（3） タマムシ

タマムシ（死んでいる） 7月上旬 どんぐり公園

タマムシはどうしてもこのコラムに入れたい虫です。なぜなら、国蝶オオムラサキと並んで、日本産の昆虫の中で最も美しい虫だからです。

しかし、10 数年間みずき野周辺を散策しているにもかかわらず、タマムシを見たことがありませんでした。したがって、このあたりにはもういないのではないかと思っていました。ところが、ごく最近どんぐり公園で、死んだタマムシを見つけました。生きたタマムシでなくて残念でしたが、ともかくも、みずき野周辺に、まだ生息していることが確認でき、「みずき野周辺の昆虫」の仲間入りをさせることができました。

玉虫の 羽のみどりは 推古より　　山口青邨

タマムシは古代人も愛（め）でた虫なのでしょう。現在法隆寺大宝蔵院に置かれている国宝、玉虫厨子にはタマムシの翅（はね）が敷き詰められていました。玉虫厨子は飛鳥時代、7世紀前半に作られたと考えられています。厨子とは仏像・舎利（しゃり）または経典を安置する仏具で、両開きの扉があります（広辞苑）。玉虫厨子は高さ2メートル余りで、台座（須弥座（しゅみざ）と台脚部）の上に宮殿（くうでん）（厨子の本体）が設置されています。宮殿（くうでん）は寺院や社殿のことで、玉虫厨子の宮殿（くうでん）は地上部に該当し、古代の寺院建築の模型を思わせます。現在タマムシの翅（はね）はわずかしか残っていませんが、作られた当時は、少なく見積もって9083枚の翅（はね）が用いられたと推定されているようです（週刊朝日百科『日本の国宝』朝日新聞社）。

自然に恵まれた古代には、夏は美しいタマムシがたくさん飛び交っていたのではないかと想像しています。